

## 20

## 物語

## (6)

## 文章の組み立て

 学習日  
 月 / 日

① 次のそれぞれの線部の漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。

(1) 複雑な気持ちになる。

(2) 勇気を奮う。

(3) 補欠の選手。

(4) 家を留守にする。

(5) 専門家の話を聞く。

(6) 鏡に顔を映す。

(7) 野菜を細かく刻む。

② 次のそれぞれの線部のカタカナを、漢字で書きなさい。

(1) 金庫をカnリする。

(2) 親にコウコウする。

(3) 少女がホガらかに笑う。

(4) 南国のクダモノを食べる。

(5) 宿題をテイシュツする。

(6) 子ども会をソシキする。

(7) 水玉モヨウのハンカチ。

(8) コーチにシュウニンする。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

④ 明治15年(1882)には、東京に鉄道馬車があらわれます。

車をレールにのせ、馬がひくものです。レールにしばらくられるため、どこにでもいくわけにはいきませんが、馬にかかるふたんが少なくなるので、それだけたくさんの人を乗せることができるようになります。さらに馬を4頭か6頭たてると、車両も2〜3両つなげることができて、市街地ののりものとしては、便利なものになりました。のちに市街電車(市電)がひろく普及するまでは、鉄道馬車は、東京の花形交通ともなっていました。

⑤ 鉄道馬車ははしるようになりますと、東京の市街地での乗合馬車の役目がなくなってきました。それで、乗合馬車は、しだいにわき道や、郊外ののりものに追いやられていきました。

〈神崎宣武「鉄道と道路」より〉

①

②

③

□ (1) 次のア〜エは ①〜③・⑥ のいずれかに入ります。最もふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア まず、明治のはじめに、東京や横浜で乗合馬車がはしるようになっていきます。それは、イギリス、アメリカ、ロシアなどの外国大使館員の公用車としてはじまったといえます。映画の西部劇でみるような馬車を想像すればよいでしょう。

イ しかし、鉄道馬車も電車にはかきませんでした。東京で市電がはしりはじめたのは、明治33年(1900)のことです。鉄道馬車のはなやかな時代は、ほんとうにみじかかったわけです。その意味では、郊外や地方に路線をもとめた乗合馬車のほうが、ややかつやくの時期が長かったといえます。

ウ 明治の中ごろからは、人の乗る馬車も、おもに都市部でかつやくしはじめました。

エ 明治10年代になると、とくに東京では、馬1頭か2頭でひく形式の乗合馬車が100台以上にもなり、乗合馬車会社もできていきます。のちにバスがでてくると、これは乗合自動車会社にうつりかわることになります。

□ (2)

④・⑤の段落の要点を、それぞれ一文にまとめて書きなさい。

①

②

③

④

⑤

⑥